§0-4.
本研究の意義

顔に関する研究はこの 10 年の間に急速な発展を遂げた。§0-3 でも紹介したように、顔の部位計測や印象測定、顔認知アルゴリズムの開発等、顔の面白さを示す実に魅力的な研究の数々が世に生みだされた。本研究で取り上げる性別の認知についても様々な角度からアプローチがなされてきたが、形態情報のみに注目が集まるあまり、色彩の関与については深く探られなかった経緯がある。本研究は性別認知のプロセスを追究するものであり、中でも肌色という要素を大きく取り上げた点において意義を主張する。

また、本研究の特色は諸領域の融合を目指すところにある。性別認知のメカニズムというテーマは認知だけに焦点を絞って把握できるものではない。また性別に着目していただけでは解釈を誤る危険性がある。一つの視点に留まらず角度を変えて更に読み込むことによって、実験データはより有用かつより確実な示唆を与えてくれるものと思われる。ここでは認知心理学的データに対し、社会心理学的、社会学的知識、解釈を加えるというスタンスを採る。このような重層的なアプローチこそが真のデータ理解に必要であると考え、認知心理学と社会心理学、社会学といった種々の視点から性別認知というテーマに迫る。

また逆に、従来、社会学、社会心理学の領域において扱われてきたジェンダーという対象に対しても、既成概念を科学的データとして取り出すという新たな切り口を提示することができるのではないかと捉えている。性別、ジェンダーというテーマに対しては、フェミニズムや社会体制としての性役割に対する疑問視を背景として、多くの社会学的アプローチがなされてきた。BMSI（Bem, 1974）や MHF スケール（伊藤, 1978）を用いた社会心理学的手法も用いられてきた。これらは何れも有用である。だが、社会体制としてのジェンダーと個人単位の態度とが完全に分離された上で扱われているところに限界が存在する上、性やジェンダーを扱う場面では感情的な論展開になる傾向も見受けられる。これらの問題に対しても、社会学、社会心理学の援用、認知科学による科学性の付加が有効に作用すると期待する。

顔こそは学問の領域の接点に位置する対象であり、その融合を実現する格好の材料であるといっても過言ではない。本研究においては領域融合的な接近を図り、顔をより多角的かつ立体的に捉える試みを展開する。